

『懷風藻』詩所引の故事と風景

— 大津皇子詩と中国文学との比較から —

加藤 有子

はじめに

私はこれまで『懷風藻』を主軸に比較文学を専門に研究してきている。

本稿では、『懷風藻』所引の故事について、またそこに現れる風景に関して中国文学との比較から考察してみたい。

そのための資料として、『高氏三宴詩集』(以下『高宴詩』と略す)と、補足資料として『蒙求』をとりあげてみたい。

かつて稿者は『高宴詩』の詩と『懷風藻』の詩の比較を行ったことがある^①。しかし、それは冗長な論で、論旨が流れがちになっていた。また、石崇と山簡の故事を整理だてていないため、明確な筋道が見えていない。本稿で改めて『高宴詩』所収の詩群との比較を行い、その混乱を正したいと思う。

『高宴詩』は、およそ高宗(六五〇〜六八三年在位)から中睿宗(七一〇〜七二二年在位)にかけて活躍した人々を中

心に、高正臣宅で行われた宴詩を集めたものである。四唐の別で言うなら初唐から盛唐頃と言えよう。同じ詩が『全唐詩』にもほぼ所収されている。しかし『全唐詩』では各詩人別に分散しているため、宴と宴詩のイメージがつかみにくい。それに対して、『高宴詩』の形になって見ると、当時の宴と詩の關係が浮かび上がってくる感がある。また景の表現に関しても同様である。『懷風藻』の研究者の中では『高宴詩』の伝来を否定する論もあるが、本稿では、出典としての意味合いは元より、同時代資料として、考察を助けるための資料として再考するところから始めたい。

『蒙求』は七四六年頃成立したと思われる^②。『蒙求』自体を『懷風藻』(七五一年成立)の詩人達が読んで詩作したと考えるには無理がある。しかし、現存する資料が限定されている場合、可能な資料から遡上するのは、日本文学研究では常套であろう(『勸学院の雀は蒙求を囀る』、『宝物集』)。

『蒙求』の元になっている逸話や故事は、『懷風藻』詩人達の受容していた唐の初頭頃に存在し、唐文化の極まる開元頃にまとめられたのが『蒙求』である。

稿者は『懷風藻』の素地になっていただろう思想や知識を採そうとするなら、必然的にその同時期に成立の文献の調査も必須であろうと考えている。

一、「倒載帰」と「彭沢宴」

まず、『懷風藻』の次の二首の詩を例示してみたい。

A 春苑言宴

大津皇子

開衿臨靈沼。遊目步金苑。澄徹苔水深。曖曖霞峰遠。
驚波共弦響。哢鳥與風聞。群公倒載帰。彭沢宴誰論。

B 初春於左僕射長王宅讌

百済公和麻呂

帝里浮春色。上林開景華。芳梅含雪散。嫩柳帶風斜。
庭燠將滋草。林寒未笑花。鶉衣追野坐。鶴蓋入山家。
芳舍塵思寂。拙場風響譁。琴樽興未已。誰載習池車。

近年の注釈では、右にあげたA大津皇子「春苑言宴」の「倒載帰」という表現で山簡、「彭沢宴」で陶淵明のことを、次のB百済公和麻呂の「初春於左僕射長王宅讌」は「習池車」という表現で山簡のことを詠み込んでいると解釈されてきて

いる。

本節では、右にあげた二つの詩の、特にA大津皇子詩の諸注の流れを見ながら、当時の作詩背景をもう一度掘り起こしてみたい。

『懷風藻』の旧注では、A大津皇子詩の「倒載帰」は山簡の故事であることに異論が無い。しかし「彭沢宴」は陶淵明でないという説もある。釈清譚『新釈』では、

彭澤は縣の名、今日の江西省湖南縣の東三十里。晋の陶淵明此に令として爲る。陶翰が「遊田司直城東別業序」に借九州于樂府。移三典于頌章、皆我顛堯之心、除秦之政、所以偶春服之宴也、山簡の故事と陶翰の故事を用ゐて、以て今日の盛宴を頌するものなり。陶侃を陶翰と同じに見たる説なるべし。

とあり、これを受けた林『新註』も、

(前半略) 譚公(釋清譚師)の説では、陶翰の故事といふ。然らば、「天子の恩徳を仰いで、春服の宴を樂しむ所以、皆已に知つてをる。謹んで聖壽万歳を賀する」ということになつて、詩も形もとのふことになる。

とあり、どちらも陶淵明が具令になつた点はあげるが、別に

典拠を考える。これに対して杉本『懐風藻』が、

山簡の故事と陶淵明の故事とを用ひて、天武天皇の御宴の盛觀を頌したものと思はれるが、「新釈」には、陶翰の「遊田司直城東別業序」の（中略）とあるを引きて、（中略）とあり、然れども彭澤とあるからには陶淵明の故事なるべし。淵明は陶侃の曾孫なり。

と述べ、彭沢は陶淵明のこととする。更に陶淵明のことを詳説し、「飲酒」詩をあげている。しかし、陶淵明と「宴」との関係に関しては触れない。次に小島『大系』は、

彭沢は彭沢（江西省）の役人（四〇五）になつた陶淵明（二六五—四二七）をさす（王勃、春日序「横琴对酒、陶潜彭沢之遊」）

とし、江口『懐風藻』は「東晋の陶淵明のこと。陶淵明は彭沢県の県令となつていたことによる」。辰巳『全注釈』は、

陶淵明が江西省湖口県の彭沢で催した宴会。（中略）唐王勃集「三月曲水宴」に「彭沢官去河陽。始伝田園帰旧国」とある。

とあり、杉本以降の論に等しい。

このように見てくると、近年は「彭沢」は陶淵明のことを詠んでいるとするのが一般的である。稿者も六朝から唐までの文献を見る限り、その点はこれらに従つて良いと考える。

ところで諸注からは、陶淵明が彭沢の令をしていたことは解るが、「宴」に関する資料は今ひとつ曖昧であると言える。唯一、小島『大系』のあげる王勃の序が近い表現を感じさせるが、現行の『全唐文』の通用本文には小島『大系』の指摘する王勃の序は無く、また近似する詩文も無い。更に唐までの資料においては、未だ近い表現を探し出せていない。

小島の指摘がどの系統の本文から出て来たのかが、興味を惹かれるところではあるが、今回はそれ以外の文献から、王勃の序でも見えるような陶淵明の宴を考えて見たい。

『懐風藻』注釈における「彭沢宴」の資料の曖昧な原因は、唐の初頭までの中国の資料には、彭澤における宴のあり方を窺わせる資料がほとんど無いからである。陶淵明自身の詩をみても、明確には出て来ない。

そこで、諸注の指摘しない、唐の同時代の資料を当たつてみたいと思う。先に触れた『蒙求』の、「陶潜歸去」を引用する。

晋陶潜字元亮、潯陽人、大司馬侃曾孫。少懷高尚、博学善屬文。穎脫不羈、任真自得、鄉隣所貴。嘗著五柳先生

傳以自況。時人謂之實錄。爲彭澤令。在縣公田悉令種秫穀。爲吾常醉於酒足矣。妻子固乞請種秬。乃使一頃五十畝種秬、五十畝種秬。素簡貴不私事上官。郡遣督郵至縣。吏白、應束帶見之。潛嘆曰、吾不能爲五斗米折腰。拳拳事鄉里小人邪。卽解印綬去縣、之賦歸去來。後徵著郎不就。又不營生業。遇酒則飲。嘗言夏月虛閒、高臥北窗之下、清風颯至、自謂羲皇上人。性不解音、畜素琴一張。弦徽不具。每朋酒之會、則撫和之曰、但識琴中趣。何勞弦上聲。

右の引用では、陶淵明と酒の關係がよく見えてくる。一つ目の傍線では、彭沢の臬令だった頃、官有の耕作田に全部酒造用のもち粟を植えさせようとした。特に「爲我」は、

これで酒を造り、自分を常に酔わせてくれれば満足だ。

ということからである。この部分は『晋書』にも見える。次の二番目の傍線部「畜素」の部分は『南史』にも近い表現は見えるが、『蒙求』が初に収録かと見える。

飾りのない琴を一張り持っていて、朋友との酒宴の会には、いつもこの琴を撫でて歌に和した。

とある。小島指摘の王勃の「横琴对酒、陶潜彭沢之遊」も、まさにこの故事に関して表現していると思われる。ただし、この部分は彭沢を辞してからの内容か。

また、『蒙求』では他に「武陵桃源」「淵明把菊」もある。「武陵桃源」では、陶淵明の「桃花源記」の内容をまとめている。迷い込んだ漁師に酒を用意し鶏をつぶして御馳走したという部分もある。「淵明把菊」では「陶淵明は酒好きだったが、重陽の節句に酒がなく、菊を把っていると、太守が酒を贈ってくれた」という逸話である。唐の初め頃に通用していた陶淵明と酒の逸話を知ることができる。

これらから推測すると、唐の初頭から中頃にかけて、陶淵明の「酒」「酒之會」に関する逸話や故事が、文学を享受する者達の周辺で広く知れ渡っていたことが言えるだろう。王勃の序は（未見ではあるが）端的にそれを表現しているが、『晋書』『南史』の記述も含めて、当時かなりその逸話や故事が享受されていたと推測する。

A 大津皇子詩に見える「彭沢宴」に戻って考えてみると、この「蒙求」に見える「毎朋酒之會、則撫我之」（朋友との酒の会のごとに琴を撫でて歌に和した）を間に入れて考えてみるとわかりやすくなる。

A 大津皇子詩の「群公倒載婦。彭沢宴誰論」の前句にあたる「驚波共弦響。哢鳥與風聞」の「弦響」がより際だって解り積できる。大津皇子の出席する宴の波・弦・鳥・風の音は、

陶淵明の酒宴での「琴の音とそれに和す歌声」よりも素晴らしいということになる。

前述したように、『蒙求』を『懷風藻』詩人達が読んでいるとは考えられない。しかし、『蒙求』は唐中頃までに存在した故事・逸話を集めたものであり、内容自体が唐中頃、その時に起こったものではない。『懷風藻』詩人達が主に受容していたのは六朝から唐初頭ころの文化であるが、特に唐の初頭頃に通用していた故事・逸話の一つが、右にあげた『蒙求』所収の陶淵明の故事と考えられる。そして、王勃序の「横琴対酒、陶潜彭沢之遊」も、A大津皇子詩「彭沢宴誰論」も、そのような時代を受けて成立したと言える。更に、次節にて論ずる『高宴詩』の詩中に見える「彭澤酒」も同様な位置関係にあると見ている。

次に、A大津皇子「春苑言宴」詩とB百濟公和麻呂の「初春於左僕射長王宅讌」詩に見える山簡の故事について考えてみたい。この山簡の故事は『晉書』「山簡伝」他、『世説新語』「仁誕」・『藝文類聚』「池」・同「諷謠」・『樂府詩集』「雜謠歌辭」など多くの書物に残されている。

『懷風藻』の諸注は『晉書』山簡伝を指摘した後、補足的に右の文献をあげている。

諸注が指摘するこれらの文献の内容は『晉書』山簡伝と大きくは異なる。当時、教科書であった史書からの影響関係が最優先ではあるが、本稿では先の陶淵明の引用に合わせ

て、あえて諸注の指摘のない『蒙求』「山簡倒載」を参考にあげてみよう。

晉山簡字季倫、司徒濤之子。溫雅有父風。永嘉中爲征南將軍、鎮襄陽。四方寇亂、天下分崩、朝野危懼。簡優游卒歲、唯酒是耽。諸習氏荆土豪族、有佳園池。簡每出多之池上、置酒輒醉。名之高陽池、時有童兒歌、曰、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載歸。酩酊無所知。時能騎馬、倒著自接離。舉鞭向葛強、何如并兒。強家在并州、簡愛將也。

右の傍線部の部分が当該部にあたる。うち「倒載」は新釈漢文大系では「車に載せていった酒食を傾け倒すことをいう。

一説に馬に後向きに乗り、園地を名残り惜しく見ながら帰るとするが、次の句に騎馬のことがあるので、重複する」と解する。また「傾け倒す」とは、「酒壺を傾け尽くした」とことという。これは『世説新語』「仁誕」の当該箇所における注釈「車に倒れて帰る」解釈と対立する。つまり、解釈の方向性として、

・「酒食を傾け倒す」(『蒙求』注系)

・「茗芋して倒れ臥す」(『世説新語』注系)

と二系統の注釈があることになる。⁽⁵⁾『蒙求』系と『世説新語』系とでおおよそ右の違いに別れるのである。また一海知義氏はこれらの「倒載婦」を音声の側から論じられ、「人事不省でぶったおれて、ねてしま」ったと解する。

A 大津皇子詩の「倒載婦」の解釈では、釋清譚『新釈』が「酔極まれば包でも何でも倒にして歸る」とあり、林『新註』と杉本『懷風藻』は釋清譚『新釈』とはほぼ同じ解釈である。

また小島大系は「宴に参加した諸公は酔いつぶれてしまつてさかさまに車に載せて帰るといふ状態だ」、江口『懷風藻』は「ひっくり返しに積みこむ。酔って正体のない者を物質を扱うように処理している」、辰巳『全注釈』は「酔って立てない状態で馬車に乗って帰る様子」と語釈する。

つまり、杉本までの旧注では「物を倒にする」解釈であり、小島以降から「酔っている者を倒にする」解釈になる。

稿者が考えるに、「日夕倒載婦」(『蒙求』)の「昼から夕方まで」では、「酒食を傾け倒して帰る」でも良いと思われるが、「日莫倒載婦」(『世説新語』)の「夕方傾け倒す」では、「酔っている者を倒にする」解釈が良いかと考える。そしてA「群公倒載婦」の「群公」では、また違っているようにも思える。主語が「群公」とすると「何を倒載するのか？」と考えると、旧注の解釈もわかるが、「倒載」する「何を」は「酔った者たち」と解釈する小島以降の方向をとりたい。

またB百済公和麻呂詩も「誰載習池車」とあるので、「載

せる」のは「誰か」＝「人」である。解釈自体は小島『大系』以下で問題ないだろう。

ちなみに、このA「群公」は唐詩にも用例の多い語であるが、中唐の戴叔倫の「奉酬盧端公飲後贈諸公見示之作」詩に「當時不敢辭先醉、誤逐群公倒載還」とある。「婦」と「還」との違いがあるが、非常に近い用法である。しかし、詩全体としての近似は無い。

本節では、A大津皇子詩にみえる「彭澤宴」「倒載婦」と、B百済公和麻呂詩に見える「習池車」という表現がどのような文学背景から生まれたかを考えてみた。ここでは諸注を再考し、次に同時代資料である『蒙求』を参考資料として比較してきた。

山簡の故事である「倒載婦」「習池車」は多くの文献にも採録され、『蒙求』は例の一つとしての位置しか示せない。しかし「彭澤宴」に関しては、『蒙求』によって他の資料では明示されない陶淵明の「酒」「酒之會」が解りやすくなる。本節では、これまで諸注の調査範囲外にされてしまってきた唐の中頃以降の資料を参考にすることの重要性を問うものである。

二、詩表現としての山簡と陶淵明

前節では、山簡と陶淵明の酒にまつわる話を主に散文の側から考察してみた。本節ではA大津皇子「春苑言宴」詩と、

B百濟公和麻呂「初春於左僕射長王宅讌」詩に見られる故事を、韻文の側から見ていこうと思う。

山簡と陶淵明の故事を念頭に、中国の唐までの韻文の資料を探ってゆくと、どうしても、冒頭に触れた『高宴詩』に向かい合うことになる。

前述したように、『高宴詩』の成立は『懷風藻』と近いが、詩自体の成立は『懷風藻』と同じ様に時期に差があるようである。稿者としては『懷風藻』詩よりやや早い成立程度に認識している（伝来の問題はまた別である。それに関しては後述する）。『高宴詩』の伝来を否定する論もあるが、そのような見地でも、同時代の資料として『懷風藻』詩を考察するための一サンプルとして考察する必要性を問いたい。

次に『高宴詩』所収の詩群の中でも、特に山簡を多く詠み込む「晦日重宴」の詩群をあげてみる。

「晦日重宴」序云云缺凡八人同用池字為韻 高正臣

①芳辰重游衍、乘景共追隨。班荆陪舊識、傾蓋得新知。

水葉分蓮沼、風花落柳枝。自符河朔趣、寧羨高陽池。

韓仲宣

②鳳苑先吹晚、龍樓夕照披。陳遵已投轄、山公正坐池。

落日催金奏、飛霞送玉卮。此時陪綺席、不醉欲何為。

弓嗣初

③年華藹芳隰、春溜滿新池。促賞依三友、延歡寄一卮。

鳥聲隨管變、花影逐風移。行樂方無極、淹留惜晚曦。

高瑾

④忽聞鶯響谷、於此命相知。正開彭澤酒、來向高陽池。

柳葉風前弱、梅花影處危。賞洽林亭晚、落照下參差。

陳嘉言

⑤高門引冠蓋、下客抱支離。綺席珍羞滿、文場翰藻摛。

莫華彫上月、柳色藹春池。日斜歸戚里、連騎勒金羈。

周彥暉

⑥春華歸柳樹、俯景落莫枝。置驛銅街右、開筵玉浦陲。

林煙含障密、竹雨帶珠危。興闌巾倒戴、山公下習池。

高嶠

⑦駕言尋鳳侶、乘歡俯雁池。班荆逢舊識、斟桂喜深知。

紫蘭方出徑、黃鸞未嚙枝。別有陶春日、青天雲霧披。

周忠鈞

⑧綺筵乘晦景、高宴下陽池。濯雨梅香散、含風柳色移。

輕塵依扇落、流水入弦危。勿顧林亭晚、方歡雲霧披。

陳子昂

⑨公子好追隨、愛客不知疲。象筵開玉饌、翠羽飾金卮。

此時高宴所、詎減習家池。循涯倦短翮、何處儷長離。

右には様々な故事が詠み込まれ、稿者には『懷風藻』詩との比較研究の糸口として非常に興味をひかれる。また、当時の宴詩の表現のあり方としても参考になるだろう。

右のうち明確に山簡の故事を詠み込んだ詩としては右詩群に5首が指摘でき、①「高陽池」、②「山公」、④「高陽池」、⑥「倒載」「山公」、⑨「習家池」と見られる。

前節の山簡の故事を振り返ると、山簡(通称山公)は「習家の池」を「高陽池」と言ったという。右の五首は山簡の故事の端的な語句を詠み込んでいるのがわかる。唐詩では山簡の故事を詠み込む例は多く、前節で見た中唐の戴叔倫詩に見える「群公倒載還」もその一例であるが、このような詩群として見ると、他に例を見ない。

中でもA大津皇子詩に見える「倒載」の語は⑥周彦暉の詩中に見えるが、④高瑾の詩の対では、

A大津皇子詩…群公倒載~~婦~~、誰論~~彭~~沢宴。

④高瑾の詩…正開~~彭~~澤酒、來向~~高~~陽池。

とあり、語を変えてA大津皇子詩と同じ山簡と陶淵明の故事を対で詠み込んでいる。

この類似をどう考えるべきか。まず考えられることは、偶然の一致。当時の作詩背景では右の二つの故事の併用は一般的であったのだろうか。しかし、現存する六朝詩や『全唐詩』などを読む限り、管見にしてそれは言えない。この二つの故事の併用は採し出せない。

次に考えられることは、A大津皇子が右の詩群を見ていた可能性である。仮に、年代がよくわかる陳子昇(六六一〜七〇一)を基準にして見ると、陳子昇が進士に及第したのが六八二年であるのに対し、大津皇子が二十四歳で「賜死」したのが持統即位前紀赤鳥元年(六八六)十月三日である。その間、四年しか無い。大津皇子が右の詩群を見ていたとは考えにくい。これに関しては別稿で論じたように、稿者は『万葉集』大津皇子歌で論じられる仮託説を『懷風藻』大津皇子作の詩でもあてはまると考えている。「仮託」にも色々解釈があるだろうが、稿者は「伝大津皇子」といったニュアンスで解している。

大津皇子詩全体として、小島氏の「臨終詩」論^⑨以降から、仮託説の方向性も持ってきているが、稿者もA大津皇子詩も本人の作ではなく、大津皇子没後、『懷風藻』が成立した天平勝三(七五一)年頃までの六十余年の間に「大津皇子作」として伝えられてきた詩であると考ええる。『万葉集』初期の歌に多く見られる形態である。

かつて別稿で、『高宴詩』所収の別の詩群と長屋王(七二九年没)宅の宴詩との簡単な比較を行ったことがある。その類似はA大津皇子詩より解りやすい。稿者は長屋王宅での宴詩が成立する頃までに、日本に伝来していたと推測している。その間、遣唐使が第七回(七〇二年)・第八回(七一六年)と派遣されている。右の詩群が正規な交流上での伝来だとす

ると、年代的にこの二回の遣唐使がもたらした可能性が高い。

詩群としての比較も以前別稿にて触れたが、上代日本人が作詩をする際、手本のような存在として、各種の詩群が存在していたと推定される。例えば夙に高瀬生氏が指摘する「送金城公主」詩群と『懷風藻』の釈井正「与朝主人」詩との近似は最も著名で解りやすい例である。A 大津皇子詩と「晦日重宴」詩群との近似もそれらと同列に位置していると思いたい。

そこで詩群として、おおまかに比較を行ってみると、A 大津皇子詩「臨靈沼」に類する語として見ると、韻が「池」であるせいもあり、①に「蓮沼」・「高陽池」とある他、②「座池」、③「新池」、④「高陽池」、⑤「春池」、⑥「習池」、⑦「雁池」、⑧「下陽池」、⑨「習家池」などの様に池を中心に水辺が描かれている。

ここでは実景としての「池」ばかりでなく、先にもあげたように山簡の故事の内容を用いて、宴の様子を表現したものが多く、A 大津皇子詩の「靈沼」自体の用例は、『文選』をはじめとして、唐詩にも初唐から晩唐まで、幅広く見られる。既に『懷風藻』諸注に指摘のある周の文王の故事を元に、派生していった表現で問題は無い。

また、A 大津皇子詩「霞峰遠」に対して、右「晦日重宴」詩群では、②「飛霞」、③「藹芳隰」、⑤「藹春池」、⑥「林煙」、⑦「雲霧披」、⑧「雲霧披」などが見られる。

A「霞峰遠」、つまり遠景ばかりとは言えないが、かすみ・

もや・きりなどでぼんやりした景を表現している。これは宴

詩の景を表現する常套であろうか。初唐以降の詩文には非常に多い。それらを受けたと思われる『懷風藻』全体に於いても、「霞」「烟霞」「霧」などの表現は非常に多く、中西進氏「懷風藻の自然」、波戸岡旭氏「懷風藻」に見える煙霞（上）、「同（下）」や小島憲之氏「上代に於ける詩と歌」「霞」と「霞」をめぐって¹⁵」など他に詳しい。また、土佐朋子氏の論文にも指摘があるが、A「霞峰」の用例は唐詩では錢起の4例に限定される。「雲峰」ではやや多く、楊巨源の「春日送沈贊府歸潯陽陽觀叔父」に「花嶼高如浪、雲峰遠似天」などある。参考までに錢起であるが、A「苔水」の用例も唐詩では錢起の2例と姚合の1例のみで（「苔井水」では李端詩に1例）あり、A 大津皇子詩とこれら中唐詩との関連を考えさせられる。同時代的な用法と見るべきか、中唐詩との直接関係を検討に入れるべきか。後考を俟ちたい。

またA「啁鳥與風聞」に対し、「晦日重宴」詩群では、③「鳥聲隨管變」、④「忽聞鶯響谷」、⑦「黃鶯未啣枝」（「未」であるが）などのように鳥・鶯の声を読み込む。

A「啁鳥」の語は趙冬曦の「奉和聖製送張説上集賢學士賜宴賦得連字」詩に「春餘仍啁鳥」などある。また太宗皇帝「初夏」詩に「啁鶯」、杜牧「夏州崔常侍自少常亞列出領麾幢十韻」詩に「啁夏鶯」、韓愈「城南聯句」に「啁雛鶯」などというように、「啁」は鶯が啁る際に用いる例も多い。

続いて、水と弦（琴）の音が響きあっている（入り交じっている）情景が描かれる要素として、

A 大津皇子詩：「驚波共弦響」

⑧ 周思鈞詩：「流水入弦厄」

とある。A「驚波共弦響」に関して、『懷風藻』詩のうち境部王詩に「弦即激流聲」・山田三方詩に「牙水含調激」などと、水音を表現するのに「弦」「琴の」調を共に詠み込む典型がある。境部王・山田三方詩は夙に伯牙の故事を詠み込んでいると旧注に指摘されて来ており、この⑧周思鈞詩においても同様に詠み込んでいると思われる。A大津皇子詩の諸注には伯牙の故事の指摘は無いが、直接伯牙の故事をふまえたというより、間に⑧周思鈞詩の右の句があつての表現であると考えている。『懷風藻』詩でも唐詩でも、また右にあげた「晦日重宴」詩群でも、幾重にも故事を踏まえるのは常套表現である。

ちなみに、伯牙の故事は『列子』『呂氏春秋』『説苑』『蒙求』にも所収され、我が国でも『源氏物語』横笛巻に見える「琴の緒絶えにし後より」という言葉など、多くの文献に影響が指摘されてきている。

稿者が思うに、『高宴詩』における景の表現は、単にこの詩群だけの問題では無く、当時の宴詩の表現のパターンや様

式を読み取ることが出来る素材の一つである。A大津皇子詩の景についても、「晦日重宴」詩群との連関のみでなく、これらの当時の詩のパターンや様式を受けたものであろうと考える。

つまり、A・Bの詩に限定されることなく、『懷風藻』詩人達が詩を作る際に、詩とはこう描くという、先例が存在したのではないかということである。元より、詩歌において、景や自然を表現する際の様式の問題は重要である。

『懷風藻』詩の理念として、最も多い例は「論語」「雍也」の「山水仁智」の理念とともに表現する例がある。古くは前田幸雄氏「懷風藻に見える『仁智』の使用法」(第一・二稿)、波戸岡旭氏「懷風藻」吉野詩の山水観―「智水仁山」の典故を中心に―、山谷紀子氏「懷風藻」の「智水仁山」の受容と展開¹⁹⁾など他、多くの方々が論じておられる。それらの「山水」の表現とは別に『懷風藻』には宴の場に「林池」を表現する詩も多い。この理念としては、或いは前述してきた山簡の故事があつたり、或いは『高宴詩』所収詩群の「林池」のイメージがあつたりするのもかもしれない。もちろん、B詩にみえる「上林」もある。

それらは景や自然は眼前に実在する以上に、典故や理念を表現するための素材として存在するということである。詩作していく手法の問題も大きく関わってくるだろう。例えば、小谷博泰氏は「万葉集と庭園―イメージモデルとしての古代

苑池」で、

つまり、作品の中の庭園は、内的世界における庭園であつて、必ずしも、外的世界、つまり現実の庭園とは一致しない。その内的世界の庭園を育てたのは、もちろん人人生験もあるが、多くの漢詩や和歌による読書体験もこれに働きかけたであろう。

と、『懷風藻』『万葉集』などの庭園の表現に関して論じられている。これは至言であろう。

右引用の「晦日重宴」詩群をモデルとして考えると、同詩群は山簡の故事を詠んでいる。眼前に現実に「林」や「池」はあつたかもしれない。しかし詩中に現れるそれは内的世界、或いは理念の世界観を表現するための「林」「池」である。山簡の故事はその一つだろう。上代日本人も作詩の際、その受容していた漢詩や和歌の世界、そして故事の受容から「山水」も「林池」も現出されてゆくのである。

また、『高宴詩』の各詩人は、故事を表現する際、それぞれ違いが生まれている。その差異も『懷風藻』詩全体を考察する上で、今後論究したい点である。

『懷風藻』詩人達は、中国の先人の詩群を学び、かみ砕き、自分たちの実景や感慨を述べていったと考えている。それは剽窃や模倣といったレベルの問題ではなく、純粹に受容と影

響の問題である、詩人達が漢詩というものを学習した際の習熟度の問題だと考えている。

本節では、『懷風藻』所収、A大津皇子詩とB百済公和麻呂詩に見られる山簡の故事と、同A大津皇子詩に見られる陶淵明の故事について、中国の詩との比較を行った。

中国の唐までの数多くの詩の中で、「晦日重宴」詩群とA大津皇子詩とは非常に近似した要素を持つ。稿者はA大津皇子詩に見られる「群公倒載帰、誰論彭沢宴」の対と④高瑾の詩「正開彭澤酒、來向高陽池」の対に関しては影響関係をみている。また、双方の景の表現は実景の上に、故事をふまえた理念を詠み込む。そしてその方法は当時の詩の作詩パターンや様式を受けたものであると考える。

また、「晦日重宴」詩群との、「詩群」としての影響関係のあり方は、既に高潤生氏が指摘されてきている中国の詩群と『懷風藻』詩とのあり方と近似するのではないだろうか。

おわりに

本稿ではA大津皇子「春苑言宴」詩と、B百済公和麻呂「初春於左僕射長王宅讌」詩に見える語を中国文学（文化）との比較から考察した。

第一節では、A大津皇子詩にみえる「彭沢宴」「倒載帰」と、B百済公和麻呂詩に見える「習池車」という表現がどのような文学背景から生まれたかを考えた。中でも本節では

『蒙求』との比較を試みた。「彭沢宴」に関しては、他の資料ではわかりにくい陶淵明の「酒」「酒之會」が理解しやすくなる。諸注の調査範囲外の、唐の初頭以降の資料を参考にすることの重要性を問うものである。

第二節では、山簡の故事と陶淵明の故事について、中国の詩との比較を行った。中でも、『高宴詩』に所収の「晦日重宴」詩群が、A大津皇子詩に非常に近似した要素を持つ。本節ではA大津皇子詩と「晦日重宴」詩群の④高瑾の詩の対に影響関係を見た。

ここでとりあげた「晦日重宴」詩群との影響関係のあり方は、夙に高潤生氏が指摘する「送金城公主」詩群と『懷風藻』詩との近似に近い。『懷風藻』詩人達が参考にしたたり、学習した詩は、詩群の形で受容することも多かったようである。

本稿では従来指摘されている六朝から唐の初頭までの資料に加え、同時代の資料との比較が『懷風藻』詩の研究には重要であることが再確認できた。漢詩という形態では、同じ六朝から初頭あたりの文化背景を受けて生まれた表現は、国が違っても似通っている点も多いはずである。伝来以外の問題を含め持つと考える。また、民族学との比較などでよく見られる構造的立場から見た場合、本来は更に広い範囲の文学のと比較も生まれていいはずだと考えている。

また、本稿では紙幅の都合上、論究の対象が山簡と陶淵明の故事に限定されてしまったが、今後は他の多くの故事につ

いても、同時代の資料との比較を行ってみたいと考えている。

※本稿の本文は、古典文学大系『懷風藻』（岩波書店）、新釈漢文大系『蒙求』・『世説新語』（明治書院）、『全唐詩』（中華書局）、『全唐文』（吉林文史出版社）、『高氏三宴詩集』（上海古籍出版社）を用いた。また『宝物集』は新古典文学大系（岩波書店）、『源氏物語』は新編日本文学全集（小学館）による。『晉書』『南史』は中華書局のものを参考にした。

※本稿にあげた諸注とその略称は以下の通りである。

- ・ 釈清譚『懷風藻新釈』（丙午出版社）……………釋清譚『新釈』
 - ・ 林古溪『懷風藻新註』（パルトス社）……………林『新註』
 - ・ 杉本行夫『懷風藻』（弘文堂）……………杉本『懷風藻』
 - ・ 小島憲之『懷風藻（下略）』（岩波書店）……………小島『大系』
 - ・ 江口孝夫『懷風藻』（講談社）……………江口『懷風藻』
 - ・ 辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院）……………辰巳『全注釈』
- これらの引用に関しては、特に注を施さなかった。

※本稿では台湾の中央研究院「漢籍全文資料庫」・故宮博物院「寒泉」の二つのデータベースの検索結果を参考に用いたが、各部分それぞれに注を加えなかった。

〈注〉

- (1) 拙稿「大津皇子『春苑』考」『日本文学研究』第四〇号(二〇〇三年・二月)
- (2) 土佐朋子「大津皇子『春苑言苑』詩の論—大津皇子が目指した『言宴』—」『古代研究』第四六号(二〇一三年・二月)
- (3) 新釈漢文大系「蒙求」他、近年の日本の注釈書では、ほぼこの頃の成立論が一般的である。
- (4) 新釈漢文大系の通釈によるが、漢籍国字解全書(早稲田大学出版部)・新書漢文大系(明治書院)など、ほぼこの解釈に等しい。
- (5) 新釈漢文大系「世説新語」・中国古典文学大系(平凡社)・東洋文庫(平凡社)・中国の古典(学習研究社)などはこの系統の解釈をとる。
- (6) 一海知義「『倒載』考」『中国文学論集 一海・太田両教授退休記念』(翠書房)(二〇〇一年四月)
- (7) 前出(2)に同じ
- (8) 前出(1)に同じ
- (9) 小島憲之「皇子大津の文学周辺」・『歴史と人物』第八七号(一九七八年一月)
- (10) 拙稿「中国詩の受容—『懷風藻』詩人達の方法—」『懷風藻研究』第六号(二〇〇〇年三月)
- (11) 拙稿「唐の公主と『懷風藻』」『日本文学研究』第五十四号(二〇一五年一月)
- (12) 高瀬生「『懷風藻』と中国文学—积弁正「与朝主人」詩考—」『皇學館論叢』第二十七卷第五号(一九九四年十月)
- (13) 中西進「懷風藻の自然」『日本漢文学史論考』岩波書店(一九七四年一月)

- (14) 波戸岡旭「『懷風藻』に見える煙霞(上)」「同(下)」『漢文学々報』第三十二号(一九八六年一月)
- (15) 小島憲之「上代に於ける詩と歌—『霞』と『霞』をめぐって—」『万葉学論攷』(一九九〇年四月)
- (16) 前出(2)に同じ
- (17) 前田幸雄「懷風藻に見える『仁智』の使用法」(第一・二稿)『福井高専研究紀要』第二号(一九六九年三月)
- (18) 波戸岡旭「『懷風藻』吉野詩の山水観—「智水仁山」の典故を中心に—」『国學院雜誌』第七九卷四号(一九八四年一月)
- (19) 山谷紀子「『懷風藻』の「智水仁山」の受容と展開」『懷風藻—日本の自然観はどのように成立したか』笠間書院(二〇〇八年六月)
- (20) 小谷博泰「万葉集と庭園—イメージモデルとしての古代苑池—」『日本文学』五十二卷五号(二〇〇三年五月)

※補遺 大津皇子詩の「金苑」の語は、唐では「金園」として寺院における用例が圧倒的多数であるが、『全唐詩』陳陶の「泉州刺桐花詠兼呈趙使君」詩に「石氏金園無此艷」と見えるような、石崇の庭園の印象も強かったようである。